SAPPORO 教区 NEWS

第29号
2019年7月31日

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10
Tel. 011-241-2785 ／ホームページ：http://www.csd.or.jp

蓑島新司祭誕生

2019年3月21日（木・祝日）11時から札幌カテドラル・カトリック北一条教会において、ボナヴェントゥラ蓑島克哉（みのしまかつや）助祭の司祭叙階式が、勝谷司教司式のもと執り行われました。昨年の佐久間神父誕生に引き続き、蓑島新司祭が誕生しました。新司祭蓑島神父から叙階の喜びの言葉を頂きました。

司祭に叙階されたボナヴェントゥラ蓑島克哉です。

司祭叙階式には500人を越える方がお越しくださいました。皆様の日頃からのお祈りによりこの日を迎えることが出来ました。この場を借りて感謝申し上げます。

わたしたちはキリストに似た者となるため、自分の十字架を背負って歩いて行きますが、誰かのために自分を捧げるとき、喜びだけでなく苦しみや悲しみも同じくらい感じます。わたしはキリストの司祭として、皆さんの喜びや悲しみに同伴していきたいと思っています。「恐れることはない」と、主がどんなときも共に歩んでくださるので心配はしていません。

父なる神の計らいにすべてを委ねたマリア様のご保護を願いつつ、わたしも主にすべてを委ねていきたいと思います。皆様、本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくおねがいします。

ボナヴェントゥラ蓑島克哉神父は5月1日付で、小野幌・江別・大麻・岩見沢教会の助任司祭として、主任司祭の後藤神父の指導のもと司牧に当たっています。

新体制移行のための教区大会が行われる

2019年5月からフランシスコ会への旭川地区、釧路地区、北見地区の地区委託体制を解消して、教区司教のもとに教区全体が直接司牧される宣教体制がスタートする。

スタートにあたって4月29日30日の両日、教区カトリックセンターに小教区の代表者らに集まってもらい、今までとの変更点や今後の宣教司牧体制について説明が行われた。

大会の詳細は、参加された各代表者から聞いていただくことにして、概要を次の通りお伝えする。

フランシスコ会とも司祭派遣契約となり、教区司教のもとに、教区司祭・宣教会司祭・修道会司祭が一緒になって宣教司牧活動を行っていく形態となる。

小教区や地区では、今後、修道会に寄付していた金員や、修道会司祭に支払っていた人件費等は支出しない。教区から支払う形となるので、小教区は教区分担金のみ支出する形態となる。小教区の負担額に従前と大きな変動はない。

司祭不在や兼務する教会が多くなってきているので、信徒の皆さんの理解と協力を頂き、これからの新しい宣教体制を一緒に築いて行きたい。失敗を恐れずチャレンジしていく中で、神様の導きと助けがあることを確信して進んでいきたい。

司祭召命が減少していく中で、信徒の役割は大きくなってきている。未来への信仰の伝達をどうしていくか。カトリック国でない日本では難しい点が多いとは思うが、家庭やミッションスクールでの信仰体験を第一歩にすることが大切かもしれない。

2019年度札幌司教区の司祭異動を下記のとおりお知らせします。

（　）内は前任の内容

◇5月1日付

初来道司祭
レイナルド神父

●札幌地区

○円山・山鼻・真駒内教会
主任司祭　加藤　鐵男 師　（山鼻・真駒内・円山共同（モデラトール））

○北一条・北十一条・北二十六条教会
主任司祭　湯澤　民夫 師　（北十一条主任）

○北一条教会　助任司祭　レイナルド・L・レガヤダ 師　（語学研修）

○月寒・北広島・恵庭・千歳教会
主任司祭　ケネス・スレイマン 師　（円山・山鼻・真駒内共同）
助任司祭　佐久間　力 師　（月寒・小野幌・江別・大麻・岩見沢・北広島助任）
協力司祭　久保寺緑郎 師　（月寒・小野幌・江別・大麻・岩見沢・北広島協力）

○小野幌・江別・大麻・岩見沢教会
主任司祭　後藤　義信 師　（北一条主任）
助任司祭　蓑島　克哉 師　（新司祭）
協力司祭　宮部　　登 師　（月寒・小野幌・江別・大麻・岩見沢・北広島協力）

○手稲・花川教会　主任司祭　韓　ジョンス 師　（手稲教会主任）

○小樽・倶知安教会　主任司祭　朴　宰　奭 師　（山鼻・円山・真駒内共同）

●旭川地区

○稚内・枝幸教会　主任司祭　今田　玄五 師　（元町・江差・八雲主任）

○名寄・士別教会　主任司祭　長尾　俊宏 師　（名寄・士別・稚内・枝幸主任）

●釧路地区

○帯広・柏林台・池田・本別教会
主任司祭　フランソワ＝ザビエ・オール 師　（小樽・倶知安主任）

○帯広・柏林台・池田・本別教会
協力司祭　中村　道生 師　（帯広・柏林台・池田・本別主任）

●北見地区

○北見・美幌・網走・遠軽・紋別教会
共同司祭（モデラトール）　川上　　剛 師　（北見・美幌・網走・遠軽・紋別主任）
共同司祭　上杉　昌弘 師　（北二十六条・花川主任）

●函館地区

○元町・宮前町・江差教会
主任司祭　祐川　郁生 師　（月寒・小野幌・江別・大麻・岩見沢・北広島共同（モデラトール）、恵庭・千歳小教区管理者）

○湯川・八雲教会　主任司祭　フィリップ・リッタースハウス 師　（月寒・小野幌・江別・大麻・岩見沢・北広島共同）

○函館地区　協力司祭　千徳　康雄 神父様（宮前町・湯川主任）

●教区

○函館地区長　祐川　郁生 師

終身助祭制度を導入

札幌教区でも終身助祭制度が始まりました

2月6日付の札幌教区の人事発令の末尾に、終身助祭の養成を受ける候補者の氏名を書き添えましたが、札幌教区でも終身助祭制を導入したいと思います。3年前に、助祭を志願する方を主任司祭より紹介され、神学生養成委員会と教区顧問団に諮ってまいりました。神学生養成委員会（3人の司祭）に司教が指名した司祭を加えて、終身助祭制度準備委員会とし、検討と志願者の意向の確認、また候補者としての受け入れのための識別を重ねてまいりました。正式には、この候補者が助祭に叙階されることになってから、教区に終身助祭制が実現することになります。志願者を候補者として受け入れるか否かについては、最終的に司教の決定によります。

「終身助祭制度」とは何か、またこれまでの司祭叙階前の助祭（司祭叙階の一年前に叙階される過渡的助祭）とはどう違うのかなどについて、以下に概略ご説明いたします。同封した「終身助祭制度―日本の教会への導入にあたって―」（カトリック中央協議会　1996・6）と合わせてお読みいただけるなら、この制度についてある程度ご理解いただけると思います。札幌教区では、この制度を試行しつつ適応と充実を図ってまいりますが、現時点では検討不十分の点が多々あることを認めます。札幌教区としては初めての試みですので、わたしもすでに導入しているいくつかの教区に学びつつ、当委員会、司祭団と共に検討を重ねて、この制度が教区にとっての司牧宣教に資するものとなるよう努めてまいりたいと思います。皆様のご理解と祈りをお願いいたします。

「終身助祭とは」―「叙階の秘跡による職階は、司教職、司祭職および助祭職である」（教会法典第1009条）とあるように、叙階の秘跡を受けた聖職者です。聖職者とは、ある信者が神からの召命を感じて志願し、その固有の特質である世俗的生活や活動を本分とする身分から切り離されて、言わば神と教会専属・専用者となることです。そのような〝切り離しと転換〟が叙階による「聖別」と言えるのでしょう（同封書P15）。終身助祭は「司祭職のためではなく、奉仕のために」按手を受けます。助祭は秘跡の恩恵に強められて、司教および司祭団との交わりの中で、典礼と愛の奉仕によって神の民に仕えます（教会憲章　29）。

助祭の資格は「適任と認められる人であること、さらに結婚生活している人にも授けることができる」（教会憲章29）とされ、独身、既婚を問わず離婚歴のない男性が対象とされますが、叙階後の新たな結婚は認められません。

「終身助祭制度の必要性」―現在、札幌教区では、多くの司祭が主日に複数の教会を巡回しミサを司式していますが、平日も宣教司牧の職務はあり、兼務する幾つかの教会で従前の要請に応えることは困難になりつつあります。多くの信徒がその使徒職によって、主任司祭を助けながら集会祭儀を司式し、ご病人にご聖体を運び、会計をはじめとする事務的な事柄や教会運営のために多くのことを担ってくださっています。しかし、小教区教会を超えて教区全体に渡って司教の指示のもとに派遣され、特に司教の要請や司牧上の要請にもっぱら応える聖務者の必要性を、教会の現代的刷新を願い第2ヴァチカン公会議が認めました。

「終身助祭制導入の経緯」―新約聖書（使徒言行録6章）、「彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします」とあるように、司牧的奉仕職として、ステファノ、フィリポなど7人が選ばれたことに由来し、監督（episkopos）＝司教、長老（presbyteros）＝司祭、執事（diaconos）＝助祭などの記載が聖書にあります。しかしその後、10世紀ころには宣教司牧を司祭が中心になって担うことによって助祭制は事実上途絶えていました。

第2ヴァチカン公会議は、増加する現代の要請にこたえるために、信徒使徒職の推進、司祭修道者の召命促進とともに、本来教会の中に大切な奉仕職としてあった終身助祭の復興を決めました（1965年）。

日本の教会では、1972年から司教総会において検討され、当時は時期尚早として見送られていましたが、1994年に制度の導入と実施が一致して決議されています（各教区においては、自主的な判断に委ねられたのですが、札幌教区では導入されていませんでした）。

「召命の識別」―司祭召命と同じように、まず教会共同体を代表して主任司祭の推薦があり、教区の助祭養成委員会が一定期間の識別を行い、意見を司教に挙げます。司教は、志願者との数度の面接の後、養成を受ける候補者となるにふさわしいと判断した場合には候補者として受け入れて、養成委員会と相談しつつカリキュラムを編成します。

妻帯している終身助祭志願者の場合は、夫・父親としての責任と義務は無くならずこれまで通り伴いますから、家族の理解と協力、犠牲と祈りは不可欠です。特に妻の完全な同意が必要ですから、候補者へ受け入れられるためには、夫婦での識別の期間が大切にされなくてはならず、その意味では夫婦二人での召命と言えるでしょう。

「養成期間」―個々のカリキュラムにも依りますが、原則的に叙階前の2年間ほど、叙階後の後期養成を入れると3～4年間ほどです。札幌教区の養成要綱によると、必要な専門単位は東京カトリック神学院などで神学専門分野を履修し、また生活面での養成や神学生との交わりを通して霊的養成や実地での研修を受け、必要に応じて教区内での研修や司祭・司教との学習を通じて補完します。

「叙階後の生活」―原則的に司教の派遣命令によって、司祭同様に各教会などへ派遣され宣教司牧活動に勤しみますが、特別の司教要請（教区の必要事や愛の奉仕など）に応える場合があります。教区の司祭給に準じる形で給与が支給されます。

「助祭の主要な仕事」―司祭固有の役務、すなわちミサの司式、病者の塗油、ゆるしの秘跡などの執行権限はありませんが、洗礼式、結婚式の司式、ミサ以外の葬儀や埋葬の司式、み言葉の祭儀の司式、病者への聖体授与、信仰教理教授、祈りの司会、準秘跡の授与、司牧の勤め、そして愛の実践などが挙げられます。

各地区での動き

イエスの小さい姉妹の友愛会、稚内を離れる

マドレーヌ・ユタン（1898―1989）によって聖シャルル・ド・フーコーの信仰を理念とし創立された友愛会は、63年前、日本の最北端である稚内に、共産主義体制下のソ連（現ロシア）の兄弟達の為に祈りを捧げる場所として一軒家を借り修道院を開設。地元住民の中で労働と祈りに従事し、稚内の信仰共同体と共に歩んできたが、高齢化等により5月13日に閉院、その感謝ミサが5月12日、勝谷司教の公式訪問に合わせ、道内各地から集まった信徒と共に執り行われた。勝谷司教は「今の時代に求められる良い牧者は、型にはまった先導する牧者ではなく、私達の身の周りにいる人々に寄り添い、話を聞き、共に良い神の道を探す牧者であり、そのように生活したのが正に姉妹会の生活だった」と述べられた。ミサ後に行われた懇親会では、参加者全員と姉妹会との昔の思い出話に花が咲き、笑いあり涙あり、有り難い63年の修道院生活を姉妹会と共に感謝した。翌13日には狭い一軒家の修道院聖堂に40名が集まり、司教司式の閉院ミサに参加した。

お世話になった修道院のシスター方

閉院の感謝ミサを奉げる勝谷司教

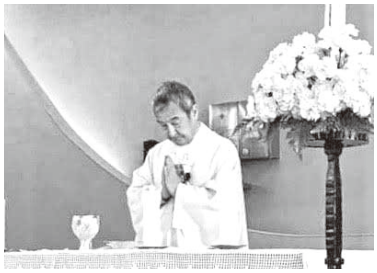
旭川地区に教区司祭着任

5月1日付の司祭異動により、今田玄五師（前函館地区長・元町・江差・八雲主任）が、稚内・枝幸教会の主任司祭として着任された。旭川地区はフランシスコ会が教区長より長く司牧委託されてきたが、今回初めて教区司祭が入ることになった。今田師は稚内教会に居住となるが、司祭居住は13年振り。5月5日の初ミサには所属信徒は勿論、稚内の元信徒、未信者、更に猿払村で研修をしているベトナム人女性3名も参加し、賑やかに執り行われた。

旭川藤星高等学校スタート

学校法人藤学園（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）が1953年の開校以来、女子校として運営してきた「旭川藤女子高等学校」が、4月から学校法人北海道カトリック学園（勝谷太治理事長）に法人移管し、更に男女共学となり、校名も新たに「旭川藤星高等学校」（吉武勉校長）としてスタートした。この春の入学者は定員を上回る146名。

そして今年9月1日には、第64回旭川地区カトリック大会が、ここ藤星高校を会場に開催される。旭川地区大会は1955年の第1回（聖体大会）から旭川藤女子高にて開催されていたが、1997年の第43回大会を最後に公共施設を会場に開催されてきた。ここに水野清哉元校長から旭川市内小教区への熱心な呼び掛けがあり、ここ数年の地区宣司評における話し合いを経て、22年振りに会場を戻すことになった。「教区立」となったミッションスクールと、地域で生きる小教区との関わり合いの深化が期待される。


初ミサを奉げる今田神父

ミッションスクールとの連携

高校2校の移管に際して、北海道カトリック学園の桶田達也事務局長からお話を伺った。

2019年4月1日より、学校法人藤学園の旭川藤女子高等学校と北見藤女子高等学校は、女子校から共学校に生まれ変わり、所属も学校法人北海道カトリック学園に移管しました。お陰様で、初年度の入学者も当初の予想を上回り、北見は入学定員を超える生徒を迎えることができました。同窓会、小教区等関係者の皆様には何かとご心配をお掛けしておりましたが、お陰様で無事スタートすることができました。ありがとうございました。そして、これからも一層のご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。

と申しますのも、勝谷司教様が共学化する両校を受け入れたのは、「青年」への「信仰の伝達」という観点で、「家庭での祈り」と並んでミッションスクールにおける「信仰教育」を重要なポイントとしてお考えになっておられるからでした。司教様はここ数年、カトリック中央協議会青少年司牧部会責任司教としてシノドスやワールドユースデイに参加された報告の中で、私たちに様々な呼びかけをされています。

『シノドスは青年への謝罪で

新たにスタートした旭川藤星高校

始まりました。教会が青年たちに耳を傾けてこなかったからです。青年たちは多くの困難を抱えながらも人生の指針を求めています。それに教会が応えてこなかったから青年が教会から離れたのだと指摘されました。今回のシノドスでは、従来の「あるべき指針」を打ち出してそれに従うようにという姿勢から、謙虚に耳を傾け同伴し続けるという教会の姿勢が表明されました。これを「シノダリティー」（シノドスの意味はともに歩む）と表現し、これからの教会の姿勢になると思われます。』

『教区立の学校と教会との連携を通して、青少年を教会に呼び戻すために、青少年を生かす信仰の道しるべをいかに表現するか。そのために教会はどう変わらねばならないのか。教会が青少年に語って聞かせるのではなく、先ずは、教会が彼らに耳を傾ける。老人の視点で教会が若者を語るのではなく、若者に教会を語ってもらう。若者との接点を失った教会は自ら出向く以外にその接点を見出しえないのです。』

『宗教科の信者の教員や、司祭修道者のチャプレンが得難いことが地方のミッションスクールの悩みですが、すぐそばに小教区があり、うまく両者の活動を連携させれば、双方の活性化につながるのではないかと期待しています。』

『熱心な一人の教区担当者や教会役員だけに頼るのではなく、地区や教区の教会全体で取り組んでいくべき大切な課題です。』

今後は、これらの課題をいかに具体化していくか。小教区の皆様とミッションスクールの私たちが知恵を絞り、共に手を携え、今の教会を担う青年を育て、彼らに未来を託すべく汗をかいてまいりましょう。

さあ、皆様。用意はよろしいでしょうか。いざ、我らが牧者ベルナルド勝谷司教様と共に、子羊たちの群れに福音を述べ伝えに出発いたしましょう。神に信頼して。

苫小牧教会
ご復活をステンドグラスと共に迎えて

昨年、有志の会を立ち上げ、信徒の皆様からご寄付を募り、主任司祭のライヤ神父様の金祝に合わせ、教会聖堂内にステンドグラスを設置、２０１８年7月15日除幕式が行われました。デザインをライヤ神父様にお願いしたところ、聖霊をイメージしてデザインして下さりました。また、制作を手掛けて下さった方はプロテスタントの信者の方で聖書にも精通しておられたので聖堂正面の制作のほかに南側の窓に聖書物語を8枚と小聖堂に母子像を制作して下さりました。ステンドグラス落成後の聖堂はとても明るく聖霊の息吹を感じられる素晴らしい聖堂になりました。その後ライヤ神父様は9月に東室蘭教会へ異動されてしまいましたが、30年間、苫小牧で宣教司牧をされたライヤ神父様の思い出は信徒皆さんの心にステンドグラスと共に残されたのでした。

昨年の胆振東部地震では苫小牧教会も被害があり、聖堂内の柱のタイルが剥がれたり、外壁が剥がれ落ちたりはしましたが、心配していたステンドグラスは奇跡的にほんの少しヒビが入っただけでほとんど無傷でした。

四旬節に入り、ご復活への準備を迎え、灰の水曜日など日が暮れてから教会聖堂に入る機会が増えました。昼間とは違うステンドグラスの印象で厳かで癒しを感じられる聖堂であり、心安らかにご復活を迎える準備が出来ました。

そして枝の主日には勝谷司教様に司式と集会祭儀司会者の任命式と黙想会の指導をして頂き、静内教会からも子供7名と大人6名が来訪をして大勢の人々による枝の行列をすることが出来、聖木曜日、聖金曜日、復活徹夜祭となり、おかげさまで聖霊のお導きにより今年は1名の方が入信の秘跡を授けられました。

聖堂のステンドグラスは神様が私たちに与えて下さった恵みであり、私たちに癒しと希望を与えてくれています。

教会に設置されたステンドグラス

真駒内教会新聖堂の献堂式を行う

２０１９年4月27日（土）に、勝谷司教様司式で10名余りの司祭や、修道者・信徒が参加して新聖堂の献堂を祝った。町内会役員の方も献堂式に参加して下さりお祝い頂いた。地域の方々とのつながりを大事にしている執行部の姿の表れと思われる。

新聖堂は、真駒内教会信徒にとっては十数年来の願いが結実したもので、その嬉しさが信徒の顔の端々や行動に表れていたようである。これも神様のお恵みで、司教様はじめ司祭団、信徒の皆さまのご協力のおかげと感謝していた。

新しくなった聖堂で、地域に根ざした新しい形での宣教が実を結ぶことを願っている。

青少年の動き

ワールドユースデーパナマ大会報告

2019年1月22日から27日までワールドユースデーパナマ大会が開催されました。日本からは1月17日から31日までの旅程となりました。日本巡礼団は3名の司教様と、同伴司祭8名を含む、総勢54名の巡礼団となりました。ワールドユースデー（以下WYD）は教皇の呼びかけによって2～3年おきに開催されていて、前回は2016年にポーランドのクラクフで開催されました。今回のパナマでは札幌教区の青少年担当司祭として、青年たちに同伴するべく大会に参加してきました。

札幌教区から参加したメンバー

パナマは日本と時差が14時間とほぼ地球の反対側に位置し、北半球にありながらも赤道に近く気温は30度以上と、とにかく暑い国でした。暑かったのは、気温だけでなく日本巡礼団を受け入れてくれた現地の方々もわたしたちをまるで我が子のように厚くもてなしてくださいました。

WYDは通常、大きく前半と後半の2つのプログラムに分けられます。前半のプログラムは、開催国の中のある一つの教区が、ある一つの巡礼団を、そっくり丸ごと受け入れてその教区での特別なプログラムを行う「教区の日々」と呼ばれるものです。日本巡礼団は駐日パナマ大使の出身地でもある「チトレ教区」に受け入れていただきました。

後半のプログラムは開催都市であるパナマシティにおける「本大会」となります。「本大会」では世界中からの参加者がパナマシティに集まります。最後の閉会ミサには70万人もの人が集まりました。日本から参加した青年たちは皆、世界中から会場を埋め尽くさんと集まっているカトリックの青年たちの熱量に感化されていました。カトリックは確かに日本においては少数派ですが、世界には同じ信仰をもつ青年たちがこんなにもいることに驚くと同時に喜びを感じたと思います。

勝谷司教は大会期間中の説教の中で「青年は未来の教会を作っていくのではなく、今の教会を担っていくのです」というメッセージを強く打ち出しておられました。「青年は教会にいないのではなく、教会が青年に寄り添っていなかった。もう青年を教会に戻す方法を会議で話し合うのはやめよう、青年と共に歩む教会であるべきだ。」そのようなメッセージは青少年担当のわたしたち司祭の胸にも響いてきます。今後の青年の活動にも期待をし、希望を与える教会としてわたしたちがあることができますように。（佐久間神父記載）

高校生　イースタービレッジへ

今年も1月2日から11日まで、フィリピン・ミンダナオ島に祐川神父が開設した児童養護施設「イースタービレッジ（EV）」を高校生たちが訪ねた。札幌教区から5名、そして秋田市の児童養護施設「聖園天使園」からも3名が参加した。引率は祐川神父、他1名。目的は「異文化に触れ、それを好きになること」だった。

出発前、未知の世界への期待感と同時に具合が悪くなるほど不安を感じていた高校生もいた。英語が通じるだろうか？友だちになれるだろうか？と。しかしEVの虹色ゲートをくぐった翌日には、この不安は跡形もなく消え、EVの庭には、子どもたちや高校生たちの笑い声が響き渡った。「EVに来たとき、みんなが家族のように接してくれてホッとした」「言葉は通じないけど、いろいろ聞いてくれたり、教えてくれたりする。何かしてくれようとしている。優しさを感じる」これは到着3日後の高校生たちの声。子どもたちはいつも高校生たちのそばにいて一人ひとりの名前を呼び、目配りをしてくれていた。「こういうことが大事なんだ」「自分からももっと話しかけてみよう」高校生たちにも心境の変化が生まれた。言葉や人種の違いを不安がったり、恥ずかしがるのではなく、互いを同じ「人」として受け入れたそのときから、世界が変わったのだ。

エクスポージャーに参加した高校生たち

旅の後半、全校生徒八千人というマンモス高校を訪ねる機会を得たが、そこでの彼らの振る舞いや挨拶はそれぞれの個性が輝いていた。この豊かな体験を忘れず、日常生活の中で思い出してくれることを期待したい。

次に、高校生の感想文を抜粋してご紹介したい。

・・・日が経つにつれどんどん仲良くなり、ゲームをしたり、会話を楽しんだりして仲を深めました。英語は苦手ですが、相手は何とか伝えようと一生懸命で僕も何とか理解しようと頑張りたくなりました。そしてみんなフレンドリーな人たちばかりなので気軽に話せるし、人見知りという言葉

も忘れてしまいます。さらにそれぞれ個性があって話していておもしろいです。朝は少し肌寒く日中は先ほどの寒さはどこへ行ったと思うほど一気に気温が上昇します。なので、急な温度差で体調を崩す人も少なくないかと、食事は職員と子供で作って下さいました。毎食おいしくいただきました。自然の中で食べるご飯っていうのはなかなかない機会でしょう。午後は自由な時間が多いので、子供たちと仲良くなるチャンスです。テニスやトランプをしたりして楽しみました。トランプでは、罰ゲームで炭を顔面に塗られるというスリルがあってより一層楽しめました。夜にはカラオケやダンスをして盛り上がりました。その時僕は少しの間「恥」を忘れることができました。

（高校1年　長尾裕哉）

・・・今回の経験で「ふるさと」は単に場所のことを指すだけではなく、そこにいる家族や友達のことを指すのだなと思いました。イースタービレッジは私の第2のふるさととなりました。またすべての物事（自分で決めたこともそうじゃないようにと思えることも）には、必ず意味があるのだとも思いました。そんな多くの宝物をくれたフィリピンエクスポージャー、参加できる人には限りがありますが、ぜひたくさんの人に参加して欲しいと思います。

（高校1年　竹永桃子）

イースタービレッジの子どもたちと

※この高校生のステキな体験報告書を各小教区、修道会、カトリック学校へお届けしています。関心のおありの方にはお分けします。教区事務局までお問い合わせください。

カトリック高校生練成会開催

3月26日から29日にかけてカトリック月寒教会において、6名の高校生が参加し「カトリック高校生練成会」が開催されました。今回のテーマは「大きなささかな」です。このテーマの着想は絵本の『スイミー』から青年と高校生執行部が選んだもので、グループ・セッションの中で「ともだち」や「友情」についての分かち合いを深めました。

分かち合いの中で、それぞれの経験や体験を語り合いながら、相手を受け入れ、また自分を受け入れてもらうことの難しさや喜びになどについて話し合いました。大会中のワークショップでは、無言で行うグループ・パズル・ゲームなどを行い、コミュニケーションや共同作業の難しさなどについて体験学習的に学ぶ機会もありました。3泊4日の間、じっくりとテーマに沿って分かち合いを行い、最後はその分かち合いの中で出された「疎外感」や「どうすれば友達を受け入れられるのか」というテーマが劇にされて発表されました。高校生らしい感覚でとらえられた「共同体性」への理解を感じることができました。

参加者の表情が、最初と最後では驚くほど変わっているのが、この練成会の特徴です。最初は警戒心が強く「来させられた」感じだった参加者も、最終日には「帰りたくない、まだもっとみんなと一緒にいたい」という後ろ髪惹かれるような表情に変化していました。ひとり一人が日常生活や学校生活では決して味わえない、その場で出会った友人と深いところで「心を分かつ」体験をしているのだと実感します。

この大会を企画し、またグループを導いてくれるのはこれもカト高を卒業した青年で、彼らにとっても3泊4日の間、ずっと高校生のリーダーを務めてくれたおかげであると言えるでしょう。こうしてこの繋がりが続くことも大きな実りと言えると思います。また、今回の練成会のもう一つ驚くべき点は、新高校1年生（3月時点で中学3年生）が4名もいたことで、その4名も親がカト高世代の、いわば「カト高2世」だったということです。かつてのカト高世代であるわたしにとってもうれしい出来事でした。こうして年代や世代を超えたつながりが、これからも伝えられていけるよう願います。

2019年3月22日 性虐待被害者のための祈りと償いの日

～ハラスメントのない共同体に向けて～

教皇フランシスコが「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設け、日本の司教団がその日を四旬節第二金曜日と定めてから今年で3回目となるこの日、札幌司教区ではカテドラル（カトリック北一条教会）において勝谷太治司教によるミサが捧げられました。カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスクから事前に道内小教区修道会等に案内とポスターが発送され、当日は札幌地区以外からも併せて約40名が集まり、各々被害者への思いを綴った祈りのカードを奉納し、心を一つにしてミサが捧げられました。

勝谷司教はミサ説教で、「聖職者による児童性虐待は犯罪であり、教会はその犯罪行為に対して時効を認めず、聖職剥奪など厳しい処分をもってこの問題に取り組もうとしている」と伝えました。そして、心に深い傷を負った被害者の方々に対して「その立場に立って、心からその声に耳を傾け対応する」教会の姿勢が示されました。また、札幌教区における被害者相談窓口ではパワーハラスメント被害についても対応しており、深刻な事態になってからではなく、気にかかるこ

とがあれば気軽にデスクへ相談してほしいと呼びかけ、信徒と共に真摯にこれらの問題に取り組んでいくと述べられました。

カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスクでは、２０１７年12月５日にホットライン（電話相談：０８０－２８７９－３１６８）を開設し、祝日・夏季冬季休業日を除く火曜～金曜12：00～16：00、皆様のご相談に応じています。また、２０１７年７月から担当者２名が道内小教区等へ啓発訪問をしております。今年３月迄に22ヶ所、延べ５５３名の方々が参加してくださいました。今後も随時啓発訪問を計画してまいります。今回のミサで集まった献金１９，２９０円はこれらデスクの啓発活動に充当されます。

訃報

※ 安息をお祈りします ※

▼トラピスト修道院

▽**山科吉光修道士**
介護施設で静養していたが6月16日13時50分様態が急変し帰天　享年86歳

▽**浜崎博一修道士**
6月27日14時ころ敗血症ショックで帰天　享年69歳

▼殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

▽**Sr.松浦　ミドリ**
2月2日16時24分老衰のため花川マリア院で帰天
享年95歳

▽**Sr.金子　和**
3月21日14時57分老衰のため帰天　享年101歳

▽**Sr.齋藤　洋子**
脳梗塞の加療中で入院していたが4月23日帰天
享年88歳

「排除ZEROキャンペーン・リレー写真展」

全国で開催されている「排除ZEROキャンペーン・リレー写真展」が、下記のとおり札幌教区で開催されます。アフリカ・中東及びロヒンギャ難民等のパネル写真（A3版）20枚を展示します。
７月20日（土）～７月28日（日）：カトリック旭川五条教会（旭川）
８月１日（木）～８月３日（土）：札幌教区カトリックセンター１階ロビー（札幌）
８月５日（月）～８月12日（月）：カトリック元町教会（函館）
問合せ：新海雅典神父（カリタスジャパン札幌教区担当者）電話0144-32-3291（カトリック苫小牧教会）

教区の風

外国人と共に歩む共同体とは

今回ご紹介するのは、函館地区の湯川教会です。函館地区では3年ほど前から「中高生会」という名称で、主に函館ラ・サール学園の未信者の学生が湯川教会をベースに青年活動をしています。とはいえ、孫世代にもなる中高生と教会の信者とを繋ぐ接点をなかなか見つけられずにいました。湯川教会所属でもあり、函館ラ・サール学園の宗教科主任の韓徳さんは、札幌教区内でも少しずつ増えている外国人技能実習生の存在を知り、彼らと年齢の近い中高生会のメンバーとの交流を通して、教会共同体の新しい形ができないかを模索していました。

きっかけは昨年秋、改めて教会に来ているベトナム人に声をかけてみたところ、11月には市内で働くベトナム人技能実習生数名が毎週教会へ来るようになりました。時を同じくして、函館市及び近郊で増加するベトナム人への支援を考えていた人がいました。それが北海道教育大学函館校准教授の森谷康文さんです。森谷さんは、同校で地域協働推進センターの委員もしており、大学が地域と協働しながら地域課題の解決を目指す取り組みにも関わっていました。韓さんと森谷さんが出会い、呼びかけに応えた北海道教育大学函館校の学生がベトナム人技能実習生の日本語学習を支援することとなりました。

現在、月2回、湯川教会でのミサ後に日本語教室が開催されています。森谷さんによると、日本語を教えるだけにとどまらず、お互いを理解しあうためにベトナム人実習生や信者と時間を共有することを大切にしたいとの思いから、教育大学の学生たちはミサにも参加しています。また北海道教育大学函館校では、地域の問題を国際的な視点をもって学ぶ「国際地域学科」があり、ベトナム人がなぜ日本へ働きに来て、お休みの日には教会へ通うのか、そうしたベトナム人に対して教会はどのような役割や機能をもっているのかなど地域社会について学生が学べる場にもなっているとのことです。

函館ラ・サール学園の学生はベトナム人技能実習生と教育大生が共に参加できる企画を考えるなどで関わりながら、日本語教室にも参加しています。また、教会の信者も数名関わり、毎回一緒に楽しい時間を過ごしながら、日本語教室が行われています。ベトナムの青年たちを通して、教会に関わりのなかった人々が通うようになり、教会で共に過ごす時間、共に語り合う時間が生まれています。

２０１９年の年頭司牧書簡では、青少年司牧、外国籍信徒の増加、そして、共同体の在り方が問われています。「自分が、あるいは自分の隣にいる誰かが、互いにかけがえのない大切な存在として、この交わりの中に無条件に受け入れられていると感じるとき、人は大きな安らぎと明日への生きる力を見いだします。それが小共同体です。」

今まさに、湯川教会はこれらの問いに対する一つの在り方を実践しています。